

2014/01/26

B年 顕現節第4主日(総会礼拝)

説教題：「あなたを召す神」

イザヤ 43:10~13

I コリ 1:26~31

マタイ 4:18~25

イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。二人はすぐに網を捨てて従った。そこから進んで、別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父親のゼベダイと一緒に、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、彼らをお呼びになった。この二人もすぐに、舟と父親とを残してイエスに従った。

イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた。そこで、イエスの評判がシリア中に広まった。人々がイエスのところへ、いろいろな病気や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者など、あらゆる病人を連れて来たので、これらの人々をいやされた。こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに従った。

私達の父なる神と主イエス・キリストから恵みと平安とが、
皆様お一人お一人の上にありますように。アーメン

【起】

本日は、年に一回の定期総会の日です。過ぎ去りし一年の歩みを振り返り、豊かに与えられた恵みを思い起こし、感謝する。そして新しいこの一年の歩みを希望と信頼をもって歩み出す時です。総会が礼拝をもって始められるのはそのためです。私たちは人知を尽くして、宣教について協議を行う。しかし、協議に先だって、人知を超えた神さまの御業が働いて下さるように祈り求める、そのような謙虚さが特に求められる時でもあります。

今日の総会礼拝に与えられた箇所は、ペトロ達四人の漁師が主イエスの弟子として召し出される「召命」の出来事が記されています。

【承】

先週の礼拝では、主イエスが異邦人のガリラヤと呼ばれた地で宣教活動を始められたことを聞きました。「悔い改めよ、天の国は近づいた」という呼びかけは、神さまの方から私たちの許へと近づいて来て下さった、だから「悔い改め」、即ち、神の御声に向き直ることが出来るのだというお話しをしました。その主の呼びかけが現実の出来事となった。それが弟子の召命です。神の招きの声をただ聞くだけでない。そのみ声に従うことこそが大切である、そう聖書は告げているのです。

山浦玄嗣(はるつぐ)さんという、東北地方の港町でお医者さんをされているカトリック信徒の方がおられます。この方は東日本大震災で津波の被害にあわれましたが、一命をとりとめ、地元で医療活動をいち早く再開された人です。山浦さんは20年前にケセン語という地元の方言で福音書を訳したことがあり、大きな話題を呼んだのをご存じの方もいらっしゃると思います。その山浦さんが、もっと聖書の言葉が身近になるようにと福音書の新しい翻訳を進め、出版の目処がついた矢先に、津波が襲ったのです。一命は取り留めたものの、あまりにも大きな被害と精神的にも大きなダメージを受けたこの時、山浦さんはこう思ったそうです。このような絶望的な状況の中で救いの希望が求められている時だからこそ、聖書のみ言葉が必要なのだ。そして、震災の経験を踏まえて、多くの箇所をもう一度訳し直したそうです。そして震災から8ヶ月後に、その個人訳聖書は出版されました。

山浦さんは、主イエスの宣教第一声を「このよきたよりに、その身も心も委ね続けなさい」と訳しています。信仰とは、心の中の問題、と考えてしまいがちです。しかし、まるで主イエスと結婚するかのように、身も心も委ね続ける。それが悔い改めなのだと思った時、信仰とは何か窮屈で束縛されるものではなく、安心と喜びに溢れた人生の道行きであることへと、思いが変えられるのではないのでしょうか。

主の弟子となることも同じです。主イエスはシモンとアンデレの兄弟に「わたしについ

て来なさい」と語られました。これは直訳すると、「私の後に来なさい」という言葉です。ついていくのですから、後ろから行くのは当たり前ですが、とても重要なことなのです。なぜなら、私達の信仰はともすると主イエスの先に進み、自分の後に主イエスを従わせようとしてしまうからです。自分が主人公で、神は困ったときに助けてくれるドラえもんのような存在だと思ってしまう。

このペトロは主イエスに叱られたことがあります。ペトロが「あなたこそメシア」と信仰告白をした後に、主イエスが最初の受難予告をされました。それを聞いたペトロが主を諫めようとした時です。イエス様は「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」と叱られます。ここで「引き下がれ」と言われている言葉が「私の後ろへ行きなさい」という言葉なのです。

【転】

どの宗教でも人間が神を探し求めています。しかし、聖書の神は、神御自身が人間を探し求めて下さるお方なのです。私達もこれまでの人生、救いを求めて、多くの回り道や行き止まり、足踏みを経験しながら教会へと導かれたのではなかったでしょうか。しかし、ここに、遂に従うべきただ一人のお方が現れたのです。もう他に救いを求めることはない。救い主自ら私達の許へと来て下さったのです。私達の身勝手な必要性によってではなく、神様ご自身が私達を必要として下さっているのです。それ故に、この私に「従え」と命ぜられるのであります。

聖書は、主イエスからの一方的な招きのみを記しており、小説であれば作者の最も腕の揮い甲斐がある、弟子達の事情や葛藤を一切描きません。つまり、聖書が伝えようとしている大切な点は、弟子達が自分は従うか否かという選択権を持っているのではなく、あくまで主イエスが主導権をお持ちになっておられるということです。

ここに救いがあります。なぜなら、自分自身の決断や信仰といったちっぽけで頼りないものよりも先に、主ご自身が私を招いて下さっておられるからなのです。もし、いつも赤字になりそうな私達の信仰口座の残高によって救いが決まるのであれば、私達はいつも赤字決算です。しかし、キリストご自身が私達の救いの担保となって下さっているのです。私達の信仰口座がどんなに真っ赤かであっても良いのです。主イエスの譬えで、一生かかっても返せない一万タラントンの借金を負った家来を、王様は憐れに思って赦して下さったではありませんか。キリストが私達の全てを担って下さっているのです。

ですから、ここで求められているのは、自分がついて行けるかどうか心配したり計算したりすることではありません。もう少し勉強してよく考えるまで待つて下さい、クリスチャンとして相応しくなるまで待つて下さいということではないのです。主イエスの招きの声に「直ぐに」従うということなのであります。そして、この招きの言葉は、丁度五年前、献身を主に迫られた私が聴いた御言でもありました。主は私たちの職場の中へ遠慮無く入って来られます。ペトロ達は網を打っているところでした。徴税人マタイは机に座っている時でした。わたしの場合は、出張で台湾のホテルで仕事をしていた時でした。そのよう

に私たちの生活の只中に、主は現れ、わたしに従いなさいと招いて下さるのです。

【結】

「召命」、この言葉はルター以前には聖職者にだけ用いられてきました。しかし、ルターは牧師や神父になることだけが召命ではない。むしろ、家庭の主婦や靴屋の親父、パン職人、全ての者達の働きの中に神さまの召命がある、そう語りました。日常の何気ない働き、当たり前と思える日々の業の中に、神さまの御心が私たちの手を通して行われていくということなのです。広島教会にはルーテル保育所、谷の百合幼稚園そしてボーイスカウト広島8団という宣教共同体が与えられています。その働きのために、今日集まって下さっている多くの先生方が与えられています。これらの先生方に総会に出席頂いているのは、私たちの日々の務めが単なる生業ではなく、神さまの召しの中で行われている働きであるということと共に覚えるためなのです。

「神の国」、それは「いつか、どこか」にあるものではありません。キリストの招きを受け、それに聞き従う時に始まる出来事です。私たち一人一人がその務めの中に、神さまの導きを感じるということなのです。日々、「わたしに従いなさい」というみ言葉を聞くことが出来るからこそ、辛くて厳しい毎日の務めを喜びと感謝の心で仕えていくことが出来るのです。

それでも、私達は主の招きに従うことに躊躇いを覚えます。ついていけるか心配なのです。しかし心配はいらない。私達の主は、私達の弱さや愚かさをご存じです。弟子の代表であるペトロは二度「私に従いなさい」という主イエスの声を聴いております。最初は今日語られた言葉です。そして、もう一度はヨハネ 21:19 で復活の主イエスに出会った時であります。この間に、ペトロは全てを捨ててイエスに従い、あなたこそメシアであると告白を致しました。だが同時に、主に従う事の報酬を求め、主イエスを三度否み、裏切ったのであります。このような弟子失格と言わざるを得ないペトロに、しかし復活の主は三度「私の羊を飼いなさい」と語られたのであります。

このように福音書の最初で語られる招きの言葉、そして福音書の最後でもう一度語られる招きの言葉は、正に信仰と不信仰の間を揺れ動くペトロを、そして私達を、自らの弱さと愚かさにくずおれ、倒れ込んでしまいそうになるこの私に、両脇から支え起こすように、「私に従いなさい」と何度も繰り返し語りかけて下さるのです。何度躓いても、何度転んでも良いのです。私達が主を裏切っても、主は私達を裏切ることはないのであります。

このような主イエスのお言葉だからこそ、私たちは信頼することが出来る。「このよきたよりに、身も心も委ね続け」ることが出来るのです。今日から始まる新しい歩みを、希望と信頼のうちにこのわたしを招き給う主に従ってご一緒に歩んで参りましょう。

人知ではどうてい測り知ることの出来ない神の平安が、あなたがたの心と思いを、キリスト・イエスにあって守るように。アーメン

以上本文 3,568 字